

まちづくり ひろしま

第40号 (平成31年3月15日)

読者数：633名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

□ 巻頭言

消費される言葉

松波計画研究所代表 松波龍一



<人口減少社会>

日本の人口は今後確実に減っていきます。国立社会保障・人口問題研究所の最近の推計によると、2015年の総人口127百万人が、2065年には88百万人、2115年には51百万人（いずれも出生中位死亡中位）になるそうです。

このような人口急減は有史以来はじめてだということで、今や楽観論・悲観論入り乱れて上を下への大騒ぎとなっています。いずれの陣営の書籍もキーワードは高齢化・社会保障・労働生産性・・・等々で、口幅ったいようですが、おおむね数字の羅列、どちらかといえば扇情的なトンデモ本の類いのもが多いような気がします。なかでも“消滅可能性都市”という殺し文句で衝撃をもたらした日本創成会議のいわゆる増田レポートは、「東京の介護需給の逼迫を緩和するために地方にCCRC(継続的なケア付きの高齢者たちの共同体)を」などという理不尽な提案に一枚座布団をあげるとすれば、はしたない悲観論の親分といえるでしょう。

ところで、51百万人というのはちょうど1910(明治43)年の人口、88百万人は1955(昭和30)年頃の人口と同じで、要するに50年かけて60年前に、100年かけて105年前に戻るということになります。もちろん人口構成は大いに変わっているものの、心配するように国中がスカスカになるわけでもありません。ちなみに、江戸時代初期は12百万人、中・後期はほぼ30百万人で推移したというのが定説となっています。

人が多ければ文化が栄えるというのであれば、現在の126百万人の中から尾形光琳や葛飾北斎を超える人が4倍のスピードで輩出されてもおかしくはないし、夏目漱石や柳田国男あるいは南方熊楠のような巨星が3倍近く続出してよかったですはずです。

そう考えると、日本は人口が増えたおかげでとりたてて立派になったわけでもなかったこととなります。ひっくり返すと、人口が減って必ず不幸せになるわけでもなかろう、というのが素人である私の感想です。

高度成長が日本をどういう国にしたのか、これから人口が減少していく中でたとえば公共サービスが具体的にどう低下していくのか、それを克服するのにどうすればいいのか、といったことを冷静に考えるよいチャンスかもしれません。

大切なのは、どんちゃん騒ぎに与(くみ)することではなく、克服に向けた創造的な方策を提起していくことであって、それを自由にトライできるような柔らかな社会を目指すことではないか、それには、国民を数字でとらえるのとは別に、もっと足元からのアプローチが必要なのではないか、と思います。

<コンパクトシティ>

集約的都市構造というのはさして新しい計画概念ではありませんが、2006年社会資本整備審議会第1次答申で集約的都市構造への改革という方向性が提案されて以来、俄然都市計画の中心テーマとなった感があります。

ただしその際の問題意識は主として“広域的都市機能の拡散”にあって、都市圏レベルで

の機能集積を目指したものでした。2013年の都市再構築戦略検討委員会中間とりまとめには、都市レベルでの将来像について「都市の中心部のみに集約しようとするのではなく、より広いエリアに居住を誘導していく」という意見も併記されるなど、常識的でわかりやすい提案となっています。

ところが、いつのまにか猫も杓子も“コンパクトシティ”ということになってしまいました。人口数万人の都市においても、住宅やさまざまな施設を中心部に集めるのがもっとも望ましい、というような誤解が広まっています。

さきの第1次答申も「望ましい都市構造は地域が選択すべし」と述べています。コンパクトシティ以外にどんなオプションがあるのか検討もしないで“集約型”に走ってしまうのは、思考停止といわれてもしかたがありません。そういう呑気さが、実は地方消滅の背景なのではないでしょうか。

声高なコンパクトシティの掛け声の陰で、市街地周辺での低密度分散居住という暮らしぶりは切り捨てられ、おかしなことに厄介者扱いされるようなことにもなっています。

実際、そういうことは都市計画の対象とする必要がない、という意見のある都市の担当課長さんから聞いて驚いたことがあります。

さまざまな居住形態が、お互いに敬意を払いつつ、都市内部の多様性をどう高め維持していくのか、そのための交通や通信、供給処理のシステムは今のままでよいのか、というようなことに対する指針を示すのが都市計画ではないでしょうか。人口減少時代なんだからコンパクトシティだ、というような言説は一見説得力をもつようにも見えますが、よく考えるとそんなに単純なことでもない気がします。

<便利言葉>

人口減少にしてもコンパクトシティにしても、あまり深堀しないで、便利な言葉として安易に口にしているうちに、もともと持っていた意味や考えかたが劣化してしまうものです。沖縄慰霊の日によく歌われるという“月桃(げっとう)の花”は「ふるさとの夏、ふるさとの夏」と繰り返される心にしみる反戦歌ですが、歌詞の中に“戦争”も“平和”も出てきません。

便利な言葉はたくさんありますが、言葉を消費してしまわないという覚悟をもつことが、都市を語るうえでの倫理ではないかと思えます。

ひろしまのまちづくりの動き

○ 広島サッカー場の建設、中央公園に決定！

2月6日、広島市、県、商工会議所、サンフレッチェ広島の4者のトップ会談で広島サッカー場が中央公園芝生広場に決定。その理由として、都市の活性化、アクセス性、建設コストを総合的に評価して他の2案より優位と判断。

市は2019年度に基本計画、2020年度から設計・建設を進め、2024年春に開業を見込むというが、市民感覚からすれば、サッカー場より旧市民球場跡地整備の方が優先されるべきと思う。

これから設計条件や資金計画など具体的な検討が進められるのであろうが、そもそも中央公園のあのエリアに何が求められているかという議論なしに、決定したことは遺憾である。

市民向けの音楽ホールがいいのか、子供向けの施設がいいのか、その他の候補を挙げたうえで、サッカー場が選ばれたのなら市民も納得できる。しかし、反対者の多い近隣住民だけを対象に説明して、公園の利用者である肝心の市民は置き去りにされた。

市の検討案を見ると、敷地の南北の幅が狭いため建物を境界ギリギリに収めざるを得ず、しかも東と南に幹線道路が走っているため、交通に支障をきたす恐れがある。この敷地に望ましいサッカー場を建設するのは至難の業ではないか。

近隣住民は一時的な騒音や交通渋滞を問題にしているが、高さ約40mの巨大な箱モノが建つことによる日影や眺望景観の悪影響や治安の不安の方が重大と思う。他にも試合のない日の活用策や現スタジアムの扱いなど課題が山積しており、市民への丁寧な説明が求められる。



イメージ・パース(市HPより)

○ 広島復興の軌跡・人物編 (第15回) ～寺光忠参議院議事部長

～特別法への深い理解と平和都市法制定への的確なリード～

今回は広島復興の直接的関係者ではないが、その過程で重要な役割を果たした寺光忠氏に焦点を当てたい。寺光氏は、広島市西大工町（現中区榎町）の出身者で、実家はお菓子屋を営んでいたとされ、東京帝国大学の法学分野を卒業後、帝国議会事務局入りし、昭和24年には参議院事務局勤務で、広島と運命的な関係を結ぶこととなる。



はじめに

私事から始めて恐縮であるが、昭和60年、被爆40周年を記念して「都市の復興」を中心テーマとした冊子を編集しようという相談を広島市から受けて、編集グループを結成し、短期で編集・出版を成し遂げたのであるが、その編集過程で痛感したことは広島平和記念都市建設法（平和都市法と略す）の制定に関する研究の不十分さであった。そこで、編集終了後にまず取り組んだのが、この平和都市法制定に深く関わったといわれる寺光忠氏を訪ね、何かの資料や情報を入手することであった。その機会が意外にも早く恵まれ、寺光邸訪問ということになった。以下、まずその顛末の報告から寺光氏に関する記述を進めたい。（以下敬称略）

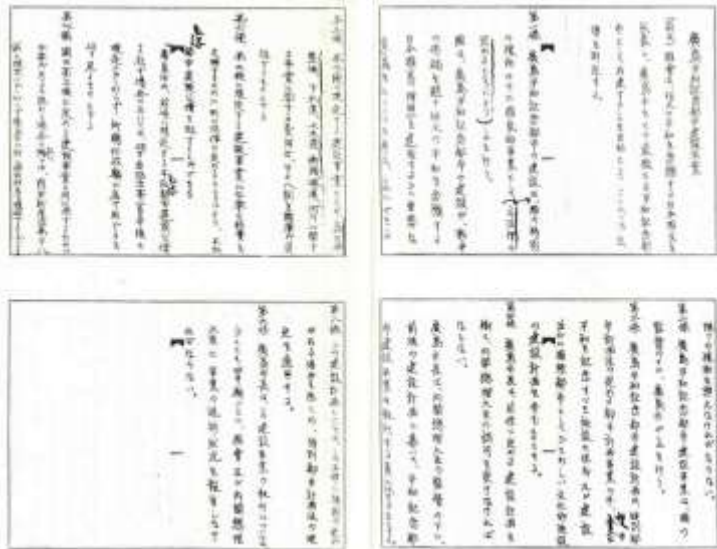
1. 寺光忠の広島への率直な思い

昭和60年8月に「都市の復興」の編集作業を終了し、平和都市法研究の態勢を整え、寺光忠の連絡先を探し出し、連絡して訪問のアポイントメント取り、訪問した。その結果、制定過程の起草案など多くの成果を得たが、その報告はいずれ後述することとし、訪問後に寺光から頂いた昭和60年10月11日付の手紙を紹介しよう。ちょっと長いが引用する。

「先般はわざわざお訪ねいただき、いろいろ御懇談の機を得まして有り難いことでした。（中略）さて、ヒロシマ平和都市法の両院の提出文、議事録の写し（いずれも省略）、お届けいたします。お納め下さい。思えば法の成立以来三十六年、その間ヒロシマで小生が思い出されたのは、この夏が二度目、昭和四十八年の中国新聞写を同封いたしました。この十二年前と今回の二回です。」というのである。なんということであろうか。平和都市法制定にあれほど貢献された寺光を、広島市の関係者は戦後40年間、ほとんど連絡も取らず、放っておいたのである。ただ一度、田淵実夫（次号続報で言及する）が寺光を訪ねており、その結果は十風子のペンネームで昭和48年4月17日付中国新聞「点滅」に、「広島復興の一恩人」という一文を寄せ、明確な証拠を残している。すなわち、被爆後40年、平和都市法制定36年にして、私が二番目に広島から寺光を訪れたということであり、寺光にしてみれば、それまでの広島市側の態度は、到底腑に落ちなかったということであろう。

そして昭和61年1月20日付の私宛の書簡で、「年初来、必要であった書庫を整理していましたが、全く忘却していた『ヒロシマ平和都市法』関係資料が一括して見つかりました。一部分をコピーして、ここにお届けいたします。」とあり、平和都市法制定過程での7次案までの起草案が見つかったというのである。平和都市法の原初的な枠組がよくわかるものとなっており、これらは現在広島市公文書館に寄贈され、公開されている。（1次案のみ資料に示す）

資料1 広島平和記念都市建設法案(第1次案)



2. 当初起草された平和都市法の法案

果たして寺光はどのような法制定過程にどのような関わりをもったのであろうか。広島市の関係者は復興事業を国営で実施して欲しい旨の請願のために上京していたが、昭和24年2月14日、郷土選出の国会議員らと参議院の寺光議事部長を訪ねたとき、立法化が構想され、当夜、

寺光は一気に法案の当初案を起草したという¹⁾。この法案の7次案まで変遷するが、第1次起草案は、条文の前に憲法並みの前文を置き、「国会は、恒久の平和を念願する日本国民を代表し、広島市を象徴たる平和記念都市として再建することを目的としてここに、この法律を制定する」として、格調高く新憲法を支える重要な関連法であることを体現しようとしたのであった。また第三条として、平和記念都市建設計画を、通常の都市計画事業の外、「旧の平和を記念すべき施設の保存及び建設、並びに国際都市としてふさわしい文化的施設の建設計画を含むものとする」というように、明確に「平和を記念すべき施設の保存」という表現で、建設だけでなく保存という概念を盛り込んでいたといえる。もしこの既定が存続していたら、広島都市空間も異なる結果になっていたのである。この条文は、恐らく建設省筋からそこまで支援の対象にできないということで削除されたのであろうが、もしこの条文がそのまま生き存続していたならば、平和記念公園の建設というだけでなく、被爆建物の保存政策においても画期的な効果を発揮することになったであろう。

7次案まで条文の細かな比較検討は、別途の考察に譲るが、大まかに言えば、後に前文の削除や平和記念施設概念の変更、8割の国庫負担条項の削除等があり、最終的に7条という極めて簡潔な法として提案され、同年5月国会で議決したのである。

3. その後の寺光忠との連携

寺光と連絡がついたことで、その後寺光は広島市から招かれて、いくつかの座談会、講演会で発言する機会を得ている²⁾。寺光に関しては、更なる資料³⁾を基に、回を改めて報告したい。
(編集委員 石丸紀興)

注1) 拙著『『広島平和記念都市建設法』の制定過程とその特徴』(広島市公文書館紀要第十一号、昭和63年) pp. 1-56

注2) 広島市公文書館編「広島平和記念都市建設法の制定の当時を振り返って—関係者による座談会—」(昭和62年8月)

注3) 寺光忠資料は国会図書館憲政資料室に多くの寄贈がなされ、その目録も公開されている。

○ 広島市景観シンポジウム「広島の景観 これまでとこれから」

広島市では広島の歴史・文化や自然を生かした魅力的な景観づくりを進めるうえで、市民との意識の共有化を図るため、平成24年以来随時シンポジウムを行っている。

今回は原爆ドームと平和記念公園周辺の眺望景観を中心とした内容で開催された。

- ・開催日 2019年2月9日(土)
- ・会場 広島平和記念資料館東館「メモリアルホール」
- ・参加者 180人(定員250人)

○ プロローグ：萬ヶ原伸二氏(広島市都市整備局都市計画担当部長)

- ・市の景観施策の紹介と市が策定したばかりの「原爆ドーム及び平和記念公園周辺の眺望景観のあり方」について説明。

○ 基調講演：杉本俊多氏(広島大学名誉教授)

- ・「聖地都市としての広島」と題して、西欧の都市ローマ、パリ、ベルリンなどの景観デザインを紹介。特に被災した教会を戦争/警鐘記念碑として残しながら周囲の景観を整えていく手法を評価し、広島の被爆の歴史を伝えていく都市計画の必要性を説く。
丹下健三氏設計の平和記念公園の軸線を始め、比治山の現代美術館の爆心地に向けた軸線、中工場の平和記念公園に向けた軸線、被爆建物の保存・活用など平和都市を意識した倫理観のあるデザインの建物が広島には多い。



杉本氏の基調講演



壇上のパネラー

○ パネルディスカッション：「広島の景観 これまでとこれから」

- ・パネリスト：森保洋之氏(広島工業大学名誉教授)、大澤昭彦氏(高崎経済大学地域政策学部准教授)、松井一實氏(広島市長)、
- ・コーディネーター：渡邊一成氏(福山市立大学都市経営学部教授)

<印象に残った各氏の主な発言>

- ・松井氏 中央公園とその周辺は南北の軸線を中心にして、本川沿いをくつろぎの空間、広島城側を文化を醸し出す空間、中央の重なる部分をにぎわいの空間として整備する方針。

これから平和記念公園の南北の平和軸線（ビスタ）、東西軸の平和大通りの公園化、比治山公園の平和の丘からの展望（パノラマ）、西国街道の道に沿って変化する景観（シークエンス）などの形成に努めていきたい。

- ・ **大澤氏** 眺望景観はシンボルを際立たせることで都市の価値や魅力を高める。景観は公共財であり、みんなで大事に守っていこうという認識を共有する必要がある。

原爆ドームを始め、平和大通り、町を取り巻く山並み、比治山、元安川等の河川など、都市の骨格・構造を視覚的に実感できるようにする取り組みがこれから重要になる。

- ・ **森保氏** 広島のみはデルタの形成など地勢的に南北軸線が組み込まれており、それを丹下氏は読み取って平和記念公園の軸線を設定。その軸線をさらに発展させていきたい。

景観には「もの」と「市民の心」が必須であり、市民の心に響くものとなることが大事。他都市に見られない広島の魅力ある景観を形成し、それを守り、育み、創ることが重要。

- ・ **渡邊氏** 広島平和記念都市建設法に謳われている「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として」の景観形成に取り組まなければならない。

広島には平和以外にも多様で魅力的な空間・景観があり、世界に誇れる景観都市を目指して市民一人一人が当事者意識をもって関わっていかなければいけない。

（編集委員 瀧口信二）

□ ほっとコーナー

「トキメキ」体験

美術家 大野真佐代

「ポーっと生きてんじゃねーよ！」と聞けば、皆さんはあのチョコちゃんを思い浮かべることでしょう。拙宅の老婦人も、「かわいい！」と大人気チョコちゃんの仕草や表情、5歳らしからぬやりとりの虜です。

「大人になると、あっという間に一年が過ぎるのはなぜ？」さて、チョコちゃんのこの問いに、「うんうん、そうそう。」と頷く私。日頃感じていたことにズバリ。「一日があっという間よね〜。」「すぐに年取っちゃうよ〜。」とつぶやく大人のなんと多いこと。何でだと思います？なんと、「トキメキが無くなったから。」だそう。子どもの頃は、一つひとつの出来事にわくわくしたり、ドキドキしたり。遠足が待ち遠しい、おやつは、何を持って行こう。あと何日寝たら、……。今日は誰と遊ぼうか？何をしようか……。そして、まだ火曜日・・・水曜日・・・木曜日・・・あ〜やっとな曜日だ〜。時間のたつのがなんと遅いこと。

「また盗まれちゃいましたね。時間泥棒がいますよ。」私と年若い同僚との、最近おさまりの会話です。職場の時計は、どうやら仕掛けが違うようです。あっという間に時がたってしまいます。さてここで、「トキメキ」とともに時間を取り戻そうではありませんか。うかうかしてはおれません。そんなに急いでどこへ行く・・・です。何事にも動じない大人も素敵ですが、ちょっとした楽しみを見つけてわくわくドキドキしながら「トキメキ」体験をするのも悪くありません。

話しは変わりますが、2002年から日韓の現代美術交流展を続けています。日本と韓国の今を生きている美術家達が、自分達の思いをカタチにし、それを共有できる時間と空間を生み出していきます。あっという間の17年でしたが、積み重ねてきた時間の層にいろいろな思いが重なります。言葉では埋まらない互いの思いを、作品展や旅や食、そして酒酌み交わすことで通わせています。新たな出会いや発見に、わくわくドキドキ「トキメキ」ながら次の交流展を楽しみに過ごしています。

どうぞ皆さんも、一歩足を踏み出せば、違う世界に出会える、そんな楽しみを見つけ一年をちょっぴり長くしてみませんか。



○ 本「原爆 広島を復興させた人びと」紹介

広島平和記念資料館初代館長長岡省吾、広島市長浜井信三、建築家丹下健三、被爆者高橋昭博の4人を選び、廃墟と化した広島を命を懸けて平和都市へ蘇らせていく男たちの物語を時の経過とともに追いかけていく。広島から世界平和を訴えていかなければという彼らの使命感に心を揺さぶられる。



☆ 全編の概要

1 原爆投下

4人のそれぞれの生い立ちと原爆投下日前後の関わりについて紹介。広島文理科大学の地質学鉱物学教室の科学研究補助員（講師）だった長岡は、原爆投下の二日前に地質調査のため広島を離れて被爆を免れる。

東京大学の大学院生だった丹下は父親の訃報を知らされ、愛媛県の実家に帰省中に列車の中で広島に新型爆弾が落ちたらしいと聞く。7日今治の家に帰ると、前日の大空襲により母親が死亡しており、両親と高校時代を過ごした広島を同時に失う。

広島市の配給課長だった浜井は、前夜の空襲警報による夜勤のため原爆投下時間は自宅で睡眠中。すぐに防空本部に駆け付け、周りの凄惨な状況のなか食料の調達に走り回る。

市内の旧制中学生の高橋は朝礼のため校庭に整列しているときに被爆。かろうじて自宅まで帰ることができたが、後遺症に悩まされながらも奇跡的に一命を取り留める。

2 破壊の痕跡

長岡は瓦礫に刻まれた熱線の跡を鉱物学の観点から研究することで、原爆の正体を解明しようとし、精力的に被爆資料を収集。後に浜井に誘われ、市の嘱託として原爆研究に専念。

浜井は広島を復興に捧げることを覚悟し、助役への要請を受ける。年明けて設置された復興局を中心にして戦後復興計画に取り組む。1947年、市長選に押され当選。復興事業の実現に向けて、その財源を確保する制度として広島平和記念都市建設法を勝ち取る。

丹下は戦災復興院の委嘱を受け、自ら広島を復興計画担当を志願。ただ復興計画書を市に提出したが、市の復興審議会で決定済みで時すでに遅し。役に立ちたいという願いも空振り。1949年、平和都市法制定の動きと並行して、平和記念公園のコンペが実施され、丹下が一等を獲得し、デビュー作となる。

3 広島平和記念資料館

コンペに勝利した丹下は実施設計に取り掛かったが、予算の不足など難問が立ちはだかり、悪戦苦闘しながら広島ピースセンターは建設されていく。1955年にやっと資料館が完成。

1949年、長岡は中央公民館に開設された「原爆参考資料陳列室」の責任者となり、翌年開館した「原爆記念館」の館長に就任し、1955年に平和記念資料館の初代館長となる。

重い身体障害を持つ高橋は1951年に市の臨時職員となり、後に資料館の七代目館長となる。「原爆被害者の会」に入っていたが、1954年の第五福竜丸事件をきっかけに日本中で起きた反原水爆運動の波に飲み込まれていく。

4 悲劇を継ぐ

資料館に展示された被爆者たちの生きた証ともいえる品々の紹介。高橋の黒い爪もある。

5 原子力の平和利用

資料館のコンセプトは原爆の被害実態を実物資料により、その恐怖の本質を伝えることだったが、1956年に資料館で原子力平和利用博覧会が開催され、1958年の広島復興大博覧会では「原子力科学館」の会場となる。その背景について解説。

6 原爆ドーム

1966年、浜井は原爆ドームの保存活動を市の広報室に託し、そこにいた高橋は募金活動に全力を注ぐ。1967年、浜井も銀座の街頭に立ち募金を呼びかけ、マスコミの協力もあり目標額を大幅に超える。庶民の善意による保存が決まり、市長として最後の置き土産。翌年没。

コメント

この本のメインテーマは平和記念資料館であり、それに関わった人たちの物語である。被爆者を含む多くの人たちのエネルギーが注がれた資料館の持つ絶大なるパワーを感じる。

(編集委員 瀧口信二)

注) 定価：1600円＋税、著者：石井光太、発行所：集英社、発行：2018年7月10日

⑤ 街角ウォッチング ⑤

水の都ひろしまの風景

広島デルタには6本の川が流れている。広島は、この豊かな流れを持つ大田川水系のデルタに形作られた街である故に、「水の都ひろしま」と言われる。

この水の都ひろしまを特徴づけるのが、6本の川の流れと河岸緑地、隣接する街並みの風景である。そして、その風景を生かす取組が、京橋川や元安川での水辺のオープンカフェであり、原爆ドーム対岸での水辺のコンサート、また河川遊覧や雁木タクシー、世界遺産航路である。さらに、2015年から始まった広島駅前の「川の駅」を中心とした「美しい川づくり」の取組などである。

このうち「水辺のオープンカフェ」は、昨年12月に国土交通省が水辺を生かしたまちづくりの先進事例を認定する初の「かわまち大賞」に選ばれた。京橋川右岸の水辺のオープンカフェは全国初の試みであり、その仕組みづくりや開設に関わった筆者としては大変うれしく思っている。

広島の川は、このような川を生かした活動や取組だけでなく、川から人を隔てる柵やフェンスがないことが大きな特徴の一つである。一般的な街中の川には、河川管理者や隣接する道路の管理者が転落防止のために柵やフェンスを設置している。

2003年当時に「水の都」のシンポジウムで来訪された徳島のNPO法人「新町川を守る会」の理事長中村英雄さんが、広島川を見て言った言葉が忘れられない。中村さんは、「広島川には人と川を隔てる柵やフェンスが無いのがいい。でも、あまり生活に川を使っていない、よそよそしさがある。」と。1990年からヘドロで汚れていた新町川を掃除し、「ひょうたん島」周遊船を運行してきた先達には、広島川の風景がきれいでも、日常的には市民が集まったり、楽しんだりしていない状況を言い当てたのだと、私は思った。

京橋川の水辺のオープンカフェが開設してから15年、広島川もオープンカフェや水辺のコンサートなど日常的に楽しむ風景が定着しつつある。これからも、多くの市民や来街者に愛され、集い、楽しむ水の都ひろしまの風景が至る所で見られることを望んでいる。

*の写真は広島市HP

技術士 片平 靖



水辺のオープンカフェ*



夜のオープンカフェ



水辺のコンサート*



基町環境護岸(本川)

○ 広島市中央公園を考える⑨ アイデアコンペ(平成23年)からの提案その3

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、広島アイデアコンペ実行委員会が平成23年に実施した被爆100年広島市中央公園アイデアコンペの中から石原滋氏の提案「核廃絶世界平和実現を推進する本拠地」(特別賞)を紹介する。

核廃絶世界平和実現を推進する本拠地

このアイデアコンペは、広島平和記念都市建設法(以下、平和都市法)の精神を具現化するために、広島市中央公園をいかなるコンセプトを持って整備したらよいか、現実的な制約条件に捉われることなく、自由な発想で提案してもらった。この提案は平和記念公園が「祈りの場」なら、この地は世界平和を実現するための「活動の場」にすべきという、平和都市法の精神に沿ったコンセプトであり、そのための大胆なアイデアが沢山盛り込まれている。

テーマ：核廃絶世界平和実現を推進する本拠地、世界交流発信の広場

1 アイデアの要旨

*** 核廃絶世界平和実現推進の場** その中心は国連。世界のあらゆる国家が意見交換し、問題解決を可能にする機関は国連以外に存在しない。被爆地であるヒロシマは国連で世界の未来像を語り導く義務と権利がある。

国連の分署として「**国連核廃絶世界平和実現推進センター**」を創設して広島に誘致。そのそばに被爆に関するあらゆるデータを集積・研究、特別権限者（常任理事国と同等の権限）としての「**広島長崎院**」を創設。さらに、次世代を担う人材育成の機関として「**国連大学**」を設置。

*** 世界交流・発信の広場** 再生産業奨励館、国際交流センター&国連大学オープンカレッジ、国際メディアセンター、アートホール、水辺公園、国際青少年センター、商工会議所を設ける。

*** 健康づくり、医療向上技術の場** スポーツ&ヘルスセンター、国際医療技術センターを設ける。

2 デザインについて

特筆すべきアイデアは、原爆ドーム前の元安川をそのまま北側に移動させて「やすらぎ川（仮名）」を掘り、「平和島（仮名）」を造ること。

川の東側に被災前の産業奨励館を復元。原爆ドームと対比させることで、記憶の風化を防ぐ装置とするとともに世界交流・発信の広場の中心施設とする。

再生産業奨励館の正面に位置し、平和島の中央に「国連核廃絶世界平和実現推進センター」を配置。その周辺に「広島長崎院」、「迎賓館」、「委員・来賓宿泊居住棟」を配置。「島」とすることで、セキュリティの高い閑静な環境が保て、この地の象徴性や純度が高まり、その存在を世界に強くアピールできる。

再生産業奨励館の背後には、国連大学を中心にして国際交流センター&国連大学オープンカレッジ、国際青少年センター、商工会議所、スポーツ&ヘルスセンターなど。

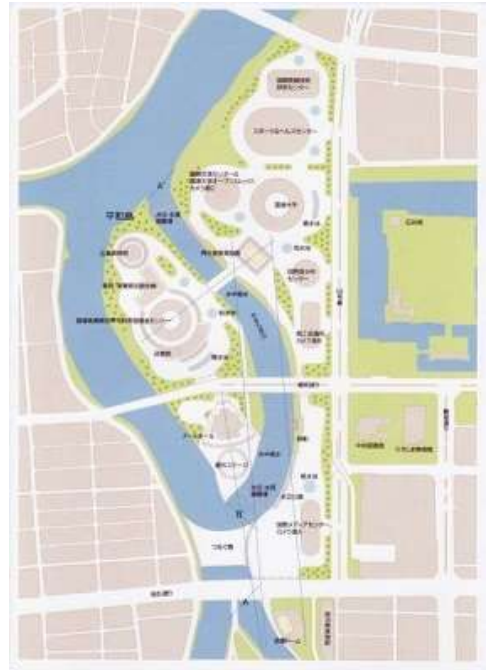
平和島の城南通り南側にはアートホールと野外ステージ、やすらぎ川を挟んでその向かいに国際メディアセンター。やすらぎ川は調整堰を設けて貸ボート等で安心して遊べる水辺公園とし、川がX状に交差する場所に「つなぐ橋」を設ける。

ヒロシマを真の国際平和都市とすることができれば、様々な交流により広範囲の分野・地域が活性化し、広島だけでなく瀬戸内海地域、日本全体へと好影響を与えることができる。

（以上は**石原滋氏の提案**の概要）



パース



配置図

<コメント>

・石原氏はアイデアコンペの自由な発想で提案してもよいという条件にひかれて応募された。ヒロシマが世界に果たさねばならない使命を感じ取り、国際平和都市となる夢を描いて、この提案の中に投影させている。

・産業奨励館を近場に復元しようという声は聞いたことがあるが、元安川ごとそっくり復元しようというアイデアにはビックリ仰天。両側に調整堰を造って穏やかな水面にし、子供たちも安心して遊べる水辺公園にする提案も実現は難しいかもしれないが、大変面白い。

・国連の分署の創設や東京にある国連大学の移設もハードルが高そうなので、今広島にある唯一の国連機関ユニタール（国連訓練校調査研究所）広島事務所を市民みんなで応援し、組織・機能の拡大を図っていくところから始めるのが現実的か。

・この地は世界平和を実現するための「活動の場」にすべきという主張には多くの人が賛同すると思う。その象徴として核廃絶を推進するための国連機関を誘致するのも一つの提案で

あろう。

・ほかに平和を実現するための場、あるいは平和を実感できる場はないものか。平和の祭典として世界から集まってくるアーティストやアスリートたちの表現の場が提供できれば、この地区の価値はもっと高まると思う。この提案のなかにもアートホールやスポーツ&ヘルスセンターがある。

・平和を記念する都市を築き上げることこそ、広島役割であり、世界平和の実現に寄与するものと思う。石原氏の提案は一つの理想であり、もし実現できれば、その役割を果たすことができるであろう。平和記念公園と中央公園は広島のコアであり、平和記念都市の象徴とすべき地区である。平和記念都市とは何かを市民に聞きたい。

(編集委員 瀧口信二)

*参考資料：被爆100年広島市中央公園アイデアコンペ受賞作品

<http://www.urban.ne.jp/home/ideacon/houkokusyo/jyusyousakuhinn.pdf>

○ 読者からの投稿

フジコ・ヘミングの時間 (映画のご紹介)

読者 柴田直美

映画はパリのアパートマンから始まります。アンティークな家具、窓、ランプ、タペストリ等で飾られた部屋。

フジコさんはアンティーク窓のガラス一枚一枚が、手作りされた当時のままであることを解説し、美術書などが並べられた壁一面の本棚の前で、部屋の模様替えをするのが好きだと言います。

パリに来るたびに「ああでもない。こうでもない。」と家具を動かした結果が、今の部屋のレイアウトになっているそう。これを語るフジコさんの足元にヘリンボーン柄のフローリングが見えるところなどもさりげなくおしゃれ。



東京にお母様が残してくれた家があることは、以前TVドキュメンタリーで見て知っていましたが、アメリカ、京都、ドイツにも自宅があることはこの映画で知りました。

アメリカの家は白い壁に蔦がからまるリゾート風の外観。

京都の家は取り壊しになりそうだった町家を買取り、宮大工さんにリフォームしてもらったそう。黒光りする柱や箆笥階段の味わい深いこと。

インタビューで「名前よりも家を残したい」と話したり、「コンサートの前に有名作曲家の生家に行って（演奏がうまくいきますようにと）お祈りしたりする」、「人の家を見るのが好き。林芙美子の家とか行ってみたいもの」etc・・・おしゃべりが好きなフジコさんですが、家関係の話題になるとさらに饒舌なる彼女にとっても親しみが湧きます。

映画の本題は、音楽、ピアノ、家族の物語ですが、長期密着のドキュメンタリーだからこそ映りこむ風景も、もうひとつの見所です。

世界各地へ公演に出かけ、その前後に時間があれば（たぶん積極的に）街を散歩します。

フジコさんは、有名観光地ではなくダウンタウンを歩きます。日本の下町で高齢の外国人女性が一人で歩いていたら、かなり違和感があると思うけど、フジコさんはその顔立ちと独特のファッションのせい、どの街へ行っても不思議と絵になるのです。

そして、行く先々で犬猫を愛で、困った人に施しをする姿のリポートに、フジコさんが天使になったかのような錯覚を覚えます。

私は今年の夏にこの映画を見ました。物語は現在のフジコさんの映像と、14歳の夏休みに書いた絵日記の朗読（回想部分）が交互に展開します。

素敵で映画だったので鑑賞直後に紹介したいと思いましたが、こちらは冬休みさえ通り越してしまいました。映画館での上映はとっくに終わっていますがDVD化されているようなので、遅い宿題を仕上げた次第です。

□ 編集後記

人口減少時代、高齢化時代が現実味を帯びてきました。その避けられない世界最先端の変化は、これから次第に速くなっていくと予想されます。

私たちの街広島は、この変化を受け入れながら豊かに暮らすための適応策を求めて、どのような街を目指していけば良いのでしょうか。

今でも目の前のミクロな課題の解決に気を取られ、都市のマクロな課題解決に結びつけられていません。最近では、ショッピングモール、アストラムラインの延伸などそのためには何でもありの感さえあります。

都市づくりは、過去、現在、未来といった時間の認識や個々と全体が融合する認識が重要です。それぞれの地区づくりや施設づくりは場当たりではなく、これらの軸に位置づけられていかなければなりません。

成熟した時代の市民の理解できる都市ビジョンの構築が早急に望まれるところです。そこに被爆 100 年のひろしまの姿を描きたいのです。

(編集委員 前岡智之)

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第24回)」開催

- ・語り人：小倉桂子氏（平和のためのヒロシマ通訳者グループ代表）
- ・テーマ：広島市の被爆者は広島市の復興をどう眺めてきたか
 - ・開催日：2019年3月31日（日）15：30～17：30
 - ・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室B（北棟5階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
 - ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
 - ・参加申込：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com
 - ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表